

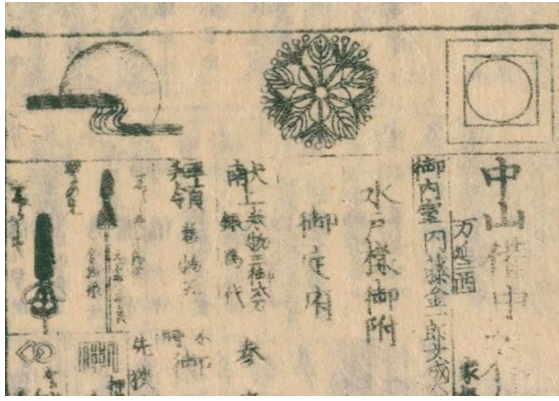
御土はんおう

第44号

八王子城下にある北条氏照・中山家範供養墓

目次

- ◆丹党と中山氏を再考する 高澤 等 2
- ◆飯能の底抜け屋台 小槻 成克 7
- ◆どこまで「奥武蔵」か 加藤 寛之 8
- ◆見学会「大宮の史跡を歩く」 関根 貴志 10



中山氏家紋(御三家方御附)

丹党と中山氏を再考する

高澤 等

郷土史の中の中山氏

飯能市の基礎を作り上げた中山氏の事績についてはまだまだ未解明な部分が多くある。中山氏は平安時代に武蔵国を中心に発生した「武蔵七党」と言われる武士集団の一つで、中山氏はその中の丹党と呼ばれる集団に属している。民間に伝承されているが、それは決して事実を伝えているものではない。中山氏の事績を正しく理解することは飯能市の成り立ちの土台とも言える事柄である。

武蔵七党とは

武蔵七党とは武蔵国周辺を地盤にして興った武士団とされている。本来は血族集団ではなく、職能を母体とした仮想血族集団だったと思われる。血族としてのリーガルの存在がなく、平均化された在地土豪の結合体で、武装したギルドのようなもので、ゆえに「党」と呼ばれたのである。彼らは荘園の管理や御牧の馬産、林業、製鉄など古代より先進的知識が必要となる産業の開発を元手に財を蓄え、やがて私営田を持ち自衛のための武力を備えて武士団化していった。

飯能市に地盤を置いた中山氏は、武蔵七党の内丹党というグループに属す加治氏の一旗である。『吾妻鏡』建久四年(一一九三)二月九日条に「武蔵の国、丹・兒玉の党類確執の事有り。すでに合戦に及ばんと欲するの由その聞こえ有るに依って、相鎮むべきの旨、畠山の次郎重忠に仰せ付けらる」と登場しており、丹党の存在は平安時代まで遡る。

武蔵七党の職性と渡来人の影

武蔵七党にはそれぞれ特徴的な職性の保持が認められる。製鉄、馬産、窯業、養蚕、林業、水運などで、これらの先進的技術や知識はほとんどが大陸からもたらされたものと言える。つまり武蔵七党には渡来系氏族の存在が見え隠れするのである。

『日本後紀』の巻八、延暦十八年条には信濃国の高麗・百濟・新羅人らが、和風の姓を望んだことから、豊岡、村上、篠井、玉川、清岡、御井、朝治、玉井などの姓が下賜されている。

同様なことは賜姓(しせい)・私称に拘わらず上野国でも武蔵国でもあっただろうことは想像に難くない。馬産や製鉄など、大陸由来の先進的知識を継承して家業とした者には、上記の信濃国の人々のように、日本人に同化した渡来人が多く含まれていたと思われ、大陸由来の職性を長期間保持していた武蔵七党の中にも、そうした渡来系の出自を持つ一族が含まれていたと想像できる。

武蔵七党の身分

一方で平将門が活躍した時代以降、上方から下ってきた辺境軍事貴族が土着し、在地の武士集団としても枝葉を広げた。その中で最も有力となったのは桓武平氏の良文流で、秩父を地盤にして秩父氏や千葉氏、三浦氏、畠山氏、葛西氏などが出て鎌倉幕府創業に寄与し、やがて全国に拡がっていった。

この秩父平氏一族は明らかに武蔵七党よりも上位身分であり、大きな家臣団を伴った大名として扱われる。また自衛のために武装した党と違い、武蔵国に繁衍した平氏は公権を守護する辺境軍事貴族に起源を持つ。つまり秩父平氏一族

は「将」であり、武蔵七党は「兵」であった。

『平家物語』では一の谷の戦いの一場面で私市党の河原高直が次のように語る。「大名は我と手をおろさねども、家人の高名をもて名譽すわれらはみづから手をおろさずはかなひがたし」

この記述から、『平家物語』が成立した時代の認識として、武蔵七党が平家の血筋を持っていた大名よりも身分が低かったことは明白である。

上記した建久四年(一一九三)の丹党と兒玉党の間に起きた諍いを、畠山重忠を仲介として調停させたことは、秩父平氏を出自とする畠山氏が丹党と兒玉党にとつては直属の上位者であったことが理解できる。

丹党の立ち位置

飯能の武士中山氏が属したのが丹党である。丹党は秩父地方が発祥地と云われ、惣領家は現在の秩父市中村町を本拠とした中村氏とされている。この中村という土地は秩父平氏の祖である平良文が本拠を置いた土地としても知られ、両者には主従に近い関係があったと推測される。

丹党に属した者として中村、山田、横瀬、薄、白鳥、野上、岩田、藤矢、淵、織原、大河原、勅使河原、長浜、安保、榛沢、新里、桐原、高麗、加治、判乃、青木、柏原、黒田、黒谷、

三沢、小鹿野、滝瀬、小島、岡田、井戸など多数の家があり、その内の加治氏から中山氏が分立したとされる。史料上に登場した当初は、「丹氏」と書かれることが多かった。

丹党は宣化天皇の子・上殖葉皇子（かみえはのみこ）の孫である多治比古王を先祖に持つ一族と認知されている。ただしその家系については江戸時代から疑義が呈されており、安田元久博士は「もとより信ずるに足りない」とし、江戸時代の『寛政重修諸家譜』では多治比古王命名の逸話など長文で解説しつつ、系図以外の史料ではまったく見出せないとして、結びに「実に信じがたきものなり」と断じている。

確実な史料が存在しない状況で、これら七党の出自を論ずることは慎重に扱うべきであろう。

丹党は本当に宣化天皇の子孫か？
一般的に中山氏は宣化天皇の血を引く多治比（丹治）氏の子孫とされている。これは事実だろうか？

丹党は宣化天皇の子・上殖葉皇子（かみえはのみこ）の孫である多治比古王を先祖に持つ一族と古くから自称しており、これが広く認知されている。現在において宣化天皇から発する系図が多く引用されており、丹党を語る場合はほぼ前提条件という立ち位置を得てしまっている。

一方で神代の神皇産霊命（かみむすびのみこと）の五世孫である天道根命（あまのみちねのみこと）を先祖とする、いわゆる紀国造を丹党の出自とする系図（諸家系譜）も広く知られているところである。両系図を比較すると、家景（蔭）以降、はほぼ同じであるが、それ以前についてはまったく食い違う。現代に伝わっているこの二本の系図は、どちらかが間違っているか、あるいはその両方が間違っていることは確実である。

丹党の出自を探る上で重要なヒントとなるのは、一族に共通する職性と信仰する丹生神社であると思われるが、紀国造説では和歌山県かつらぎ町にある丹生都比売神社の祝となる大丹生直を経由していることから、丹党が丹生神社を奉斎する根拠も含有する系譜となっている。



丹生神社(飯能)

一方で宣化天皇氏祖説では、丹治家信が延暦十二年（七九三）、丹生氏に養子として入り丹生総神主家を継ぎ、父丹治家義に丹生明神が追号されたことされるが、丹生都比売神社ではそのような事実は認めていない。

もし宣化天皇後裔多治比氏説が正しければ、そこに紀姓説の系図を創作するメリットはないであろう。一方で紀姓説が正しければ、宣化天皇後裔とする系図は家格を上昇させることになり、系図を創出するメリットは大いにある。もしさらに低い身分を出自としていたなら、その両方にメリットがあるだろう。系図の多くは同様の欲求の元に家格を上昇させることを意図して創作されていることを勘案しなければならぬ。

宣化天皇を氏祖とする系図を見てゆくと従三位中納言に叙せられた多治比廣成（？く七三九）までの者は実在が確認できるが、その子という家隆以降の人物は実在を確認できない。

以前、当会で『武蔵七党系図』に収められている丹党系図には致命的な欠陥があることを指摘した。それは多治比廣成以降の実在人物が系図に登場しないということである。実際の多治比一族は廣成時代以降の人物も『日本後紀』『日本三代実録』の中で、その活動を多く見るこ

とができる。しかし『丹党系図』は『続日本紀』に登場する人物は出てくるが、『日本後紀』『日本三代実録』に出てくる多治比一族は一人も登場しないのである。これは系図を作成した者が『日本後紀』『日本三代実録』を見ていなかったことで、その間の人物については創作せざるを得なかったものと解釈できる。また古くから指摘されているが、系図に登場する飛鳥・奈良時代の人物に「家隆」「家範」など中世で用いる諱が付けられており、この点においても系図の信用度は極めて低いと云わざるを得ない。

家系の改竄はいつ始まったのか

源頼朝が一一九〇年に上洛した際に、随兵の内、参内に供奉する者が無官であるのはよろしくないので兵衛尉（七位相当）を授けるべきと勅定（ちよくじょう）があり、20人を推挙するように命じられた。しかし頼朝は略式としてその半分の10人だけ推挙している。その10人は千葉常胤、梶原景茂、八田朝重、三浦義村、葛西清重、和田義盛、和田義連、足立遠元、平賀朝政（雅）、比企能員で、いずれも藤原氏と平氏の出自の者である。

上記10人の人物としてその出自にまったく疑惑がないというわけではないが、鎌倉御家人には官職を賜るに足る姓・出自を持つ者が少なく、朝廷と相對する幕府を成立させて権威付けを急ぐ頼朝にとって、御家

人の出自の低さや無教養ぶりは悩みの種であったことが想像される。このことから任官の可能性が有る御家人には、官職を得るにふさわしい姓を名乗るよう家系の改竄が暗に求められた可能性があり、家系仮冒の歴史は鎌倉幕府が積極的に関わることで始まったのではないかと思われる。

例としてあげられるのは毛呂氏の場合である。毛呂季光は頼朝創業の近臣として準一門として扱われた。『吾妻鏡』には「毛呂の太郎藤原季光国司の事。

これ太宰権の師季仲卿の孫なり」とあるが、年代的に見ても孫というのは無理があり、系図を見るとそれ以前に数代にわたって丹党の家と通婚している。しかも太宰権師藤原季仲の母を丹党中村時房の娘としているなど、身分差も居住地も無視したまったく信用できない内容である。これは頼朝の近臣として、豊後守任官のために家系を偽ったと考えざるを得ない。しかもこの操作は毛呂氏自身が望んだわけではなく、おそらく頼朝側から上意下達で家系の修正を求められたのだろう。

任官における出自の制約は戦国時代になっても変わらない。松平家康は永祿九年（一五六六）、三河守任官のために源氏から一時的に藤原氏に改姓している（勅許は翌年正月）。これは取りも直さず家康本来

の家系では三河守を得ることができなかったことを物語っている。翻って鎌倉御家人も、官職を得る機会が訪れることに備えて、家系を改竄しておく必要に迫られたと考えられる。

以上のことを踏まえても、丹党が宣化天皇を氏祖とした多治比氏（丹治氏）であることを無条件に前提として語ることは躊躇せざるを得ないのである。

あらためて丹党の職性と信仰

丹党は製鉄・鍛冶を職性に持つ一族で、それは平安時代から戦国時代まで一貫して変わらない。東秩父の大河原郷に領地を得た丹党大河原氏は、惣領中村氏に従って播磨国宍粟郡に移住するが、同郷が産する宍粟鉄は全国的に高品質な鉄と知られている。大河原氏は「秩父大菩薩」と刻んだ刀剣を作らせたが、その一つが国宝の「謙信景光」である。

また加治氏は入間川から得た砂鉄を元に製鉄を家業とし、入間川左岸に点在した柏原鍛冶を支配したが、その柏原鍛冶には荒井（新居）、岡、豊田、入子などの名字があった。

阿須から仏子にかけての入間川は採算点である含有率0.5%をはるかに超える砂鉄を有しており、中には含有率5〜6%と採算点の10倍を超えている場所もある（入間市博物館紀要14）。秩父地方発祥の丹党が加治郷に進出していた背景には、こ

うした砂鉄を求めて来たと考えて間違いのないであろう。丹党諸氏は何百年を経ても製鉄・鍛冶という職能を維持しているということは、その出自を考える上では極めて重大な点である。

丹党の諸家は屋敷地に隣接して丹生神社を勧請していることは夙に知られている。また加治氏はその名字の音訓に拠るものか、梶紋を用いる諏訪神社を奉斎することもあったようである。

中山氏はいつ成立したのか

『飯能市史・通史』では『吾妻鏡』に登場する中山次郎重実、四郎重政、五郎為重などを挙げて丹党に属する者と書かれている。しかし『桓武平氏諸流系図』（越後国奥山庄史料集）に「秩父十郎武綱―渋屋基家―平三大夫重家―中山次郎重真（ママ）、弟渋屋庄司重国」とあり、『吾妻鏡』に登場する中山氏は飯能の中山氏とは無関係であることが解る。つまり鎌倉時代から飯能の中山氏

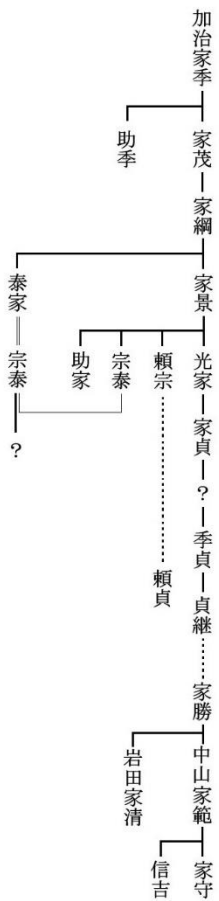
が存在していたというのは誤認と云うことになる。

中山氏は加治家季の次男助季が分家した丹内家の子孫とされている。家季は『吾妻鏡』で頼朝上洛の際に随兵として登場する加治次郎に比定されている。加治家季の嫡流は家茂が継いで、野田村（元加治）の円照寺付近に居館を設け、系図上では家季の子助季が現在の飯能市中山に居を定めて中山氏を興したことになる。

しかし中山の名字は戦国期に至るまで史料上はまったく確認できない。中山勘解由家範（一五四八〜一五九〇）は「加治勘解由左衛門吉範」を称しており、中山氏を称したのは早くても家勝（？）一五七三の代、確実なのは家範の代と考えられる。

中山氏が江戸幕府に提出した家譜『寛永諸家系図伝』によると、「元は加治を称し、のち中山に住するに より中山と号す。いつれるときあらたむることをしらず」とあり、『寛政

加治・中山氏系図



重修諸家譜』では「十三代の孫家勝にいたり同郷中山村にうつり住せしより、家号とすといふ」とあり、家譜では一族の中山移住を家勝の代としている。ただし中山家範館址が発掘されない限り、中山移住時期や廃絶時期など年代感は未詳である。

中山氏の鍵を握る加治豊後守貞継

中居の宝蔵寺は加治氏の館跡と伝わる。宝蔵寺の開基は加治豊後守貞継で、その位牌が残る。また宝蔵寺には大石駿河守重仲の位牌も残っている。大石重仲は現在の青木第二会自治館付近に城を築いたという伝承があり、武蔵国の守護代であったが、享徳四年（一四五五）に分倍河原の戦いで戦傷が元で死亡している。

これほど地位に隔たりのある重仲が中居の加治氏館門前に城を築いていたとすれば、中居にいた加治氏は大石氏と主従関係にあったと考えてよいと思う。中居の宝蔵寺は江戸時代の記録に「武州高麗郡下加治村青雲山宝蔵禅寺」とあり、元々は下加治に属していたものと思われる。

加治豊後守貞継は中山家範館のすぐ南にある心應寺も開基しており、また智観寺の住職を出した中山家臣山崎家の系図に「加治豊後新左工門貞継末裔」とある。

加治貞継は加治本家が名乗る「豊後守」の受領名を称しており、また

加治本家の系譜の通字（とおじり）である「貞」を用いている。また中山氏も加治嫡流家を用いた「家」の字を通字としている。

以上のことから、加治貞継は加治嫡流家と中山氏を繋ぐ直接的な先祖ではないかと思われる。

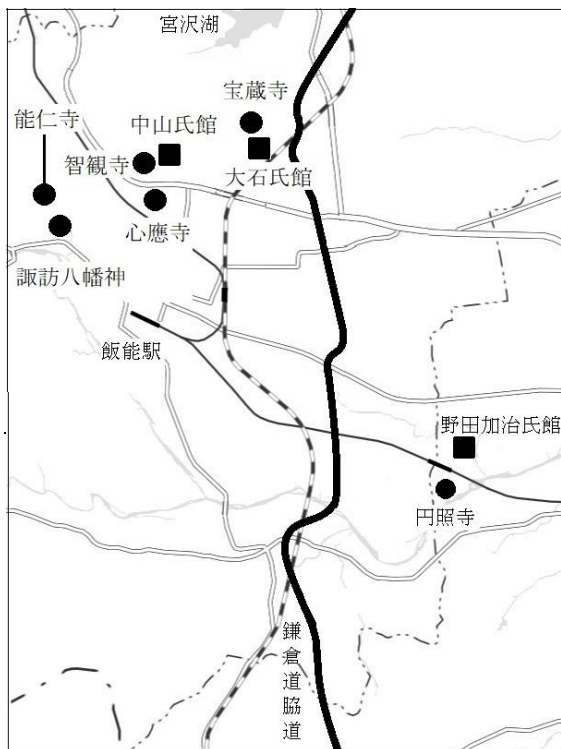
加治氏の動向

加治豊後守貞継と大石重仲の位牌が同じ宝蔵寺にあるということは重要で、加治貞継の動向から、加治氏は大石氏に従い中居・中山に移転したものと考えられる。

元加治の加治氏館は第9代加治豊後守季貞の時代の至徳三年（一三八四）まで用いられたという（入間市博物館紀要第12号）。季貞の子が、同じ豊後守を名乗る貞継とすれば、

元加治の居館退去と、中居・中山での加治貞継の登場には時代的に連続性が生じる。

通説では永禄四年（一五六一）六月三日に、北条氏康が加治惣領分百貫文その他を金子氏に新恩として与えていることから、この直前に加治惣領家が上杉に味方したことで滅亡したものと解釈されている。しかし『関東幕注文』には加治氏は登場しない（勝沼衆として出てくる加治氏は赤沢の加治氏である）ことから、加治氏が上杉氏から離反したとする説は受け入れがたい。つまり永禄年間に滅亡したという加治本家は、至徳年間に他所に移転しており、すでに野田村には存在していなかったと思われる。あくまで私論だが、中山氏こそ、名字を変えたが加治氏



加治郷地図



宝蔵寺

の本来ではないかと考えている。『関東幕注文』に登場する飯能武士から推測すると、飯能市の平野部では、入間川右岸は三田氏、左岸は大石氏の勢力下に二分されていたと考えられる。

大石重仲の子で、八王子子城にいた安祝（安叔）という人物は、父祖の供養のために浄牧院（東久留米市）を開基して、中居の隣の下加治村の土地を寄進している（浄牧院開基については検討の余地有り）。また日高市聖天院にも大石重仲の位牌があるという。大石氏の支配は白子、日高市の平沢方面にまで確認され、加治（中山）氏の領地は大石氏の支配下にあったことは間違いない。

このことから加治（中山）氏は、

北条氏照を養子とした大石氏と100年以上にもわたる主従関係であったことが想像される。

歴史的に貴重な宝蔵寺の位牌

因みに中居の宝蔵寺にある加治豊後守貞継の位牌は、私が調べた限りでは、実在した武士の位牌として日本最古の雲首形（うずがた）位牌である。これまで日本最古とされて

いたのは徳島県驚敷町中山の生杉氏所蔵の位牌で、応永二七年（一四二〇）のものである。この位牌は徳島県指定有形文化財に指定されており、このことから応永三年（一三九六）の銘がある宝蔵寺の位牌が未指定であることは文化的損失であり、早急に文化財指定が望まれるところである。



表 真寂山翁仁公菴主靈



裏 加治豊後之新左衛門尉丹氏朝臣貞継 應永丙子八月一日更衣坐化寿六十二

加治貞継位牌(表裏)

大石氏の家臣から北条氏の陪臣に永禄二年（一五五九）に上洛し、関東の差配を將軍から一任された長尾景虎は、翌三年に関東管領就任のため越山して関東に進撃した。すると多くの関東武士がその傘下に馳せ参じ、飯能武士も三田氏の家臣として景虎の幕下に入ったことが『関東幕注文』に記されている。しかし、そこには中山氏の名は登場しない。

この頃の大石氏はすでに新興の北条氏から氏照を養子として迎え、その勢力に吸収され、上杉、長尾とは敵対する勢力下にいたからである。

中山家範も大石氏の家臣から、自然と北条氏照の家臣へ移行することになったが、小田原北条氏の直臣ではなく、あくまでも陪臣という立場であった。

中山の館は史跡として「中山家範館」と名付けられているが、はたして中山家範が成人後に当地に住んでいたかを立証することはできない。家範は八条流馬術を八条憲勝（上杉憲勝）から伝授されている。憲勝は松山城主の地位を失って後に北条氏から都筑郡内に300貫文を宛がわれており、幼少の家範は八条流馬術の名手と云われるだけの習得期間を八条憲勝の元（相模国）で過ごしていたと考えられる。この期間は大石家から小田原北条氏に対して証人（人質）として預けられて

いたと考えられるのではないかと思う。

中山家範館については発掘調査が成されるまでは、稼働した時期も未詳であり、鎌倉期から室町末期まで広く想定しておく必要がある。また智観寺にある加治氏関連の板碑が屋内に移動する際に、立てられていた場所が発掘され、その結果、18世紀にこの場所に埋設されたことが確認された。それ以前に板碑がどこにあったかは不明である。智観寺や円照寺にある板碑は、それぞれ加治氏諸流の居住地を想定する材料となっているが、移動することが多い板碑を基にした居住地は決して確定事項ではないと思われる。

以上のように飯能市の礎を築いた中山氏については、実像とはかけ離れた伝聞を色濃く残している。飯能市の郷土の武家でありながらもまだまだ謎も多く、一市民として今後の精緻な研究が俟たれるものである。

（日本家紋研究会会長、
当会副会長）

表紙の写真について

八王子城跡麓にある北条氏照の供養塔と中山家範・信治の墓は昨年破損してしまいましたが、管理する宗関寺（足利崇昭住職）により修復され今年2月26日に開眼供養が行われました。

飯能の底抜け屋台

小槻 成克

七月一日に近い週末二日間に開催される飯能夏祭り。見物人がたくさん繰り出す、それは賑やかなお祭りです。皆さんのお目当ては、露天商もさることながら、近隣ではお目にかかれない「底抜け屋台」から聞こえてくる迫力あるお囃子でしょう。

底抜け屋台の登場・活躍・衰退

この底抜け屋台は祭礼屋台の一種で江戸時代半ば、宝暦年間(一七〇〇年代後半)に山王権現と神田明神の祭礼である天下祭りに出



天下祭り出場時の底抜け屋台「山王祭之図」(文政9年/1826)

現したものです。

享保六年(一七二一)、質素儉約を好む將軍吉宗の改革の一環で、天下祭りも規制され、人気出し物である絢爛豪華な大型屋台が禁止されました。その後、將軍代替わりを経た宝暦九年(一七五九)ごろ、再び屋台を出す機運が高まります。今回は大型屋台の機能を舞台専用の踊り屋台とお囃子専用の底抜け屋台の二台に分け、禁令に触れない体裁でお祭りに再登場させたのです。

以来江戸時代終わりまで山車と踊り屋台+底抜け屋台セットはお祭りの主役でしたが、明治維新以降お祭りへの幕府援助も無く費用負担が増えたこと、幕府寄りの江戸文化を嫌う明治政府がお祭りに規制を掛けたこと、市街地に電線が架設されたことなどを理由に、震災戦災も重なって江戸東京市中では山車も底抜け・踊り屋台もほぼ完全に姿を消しました。現在では町神輿が盛んに担がれ、祭りの主役となっています。

また江戸時代より山車とともに底抜け・踊り屋台も川越、土浦、前橋、高崎、佐倉の城下町や八王子、秩父、青梅、熊谷、本庄、佐原、栃木、桐生、藤沢などの商業地にも伝わりましたが、多くは山車祭りだけ存続し、底抜け屋台行事は廃れました。そんな中、今な



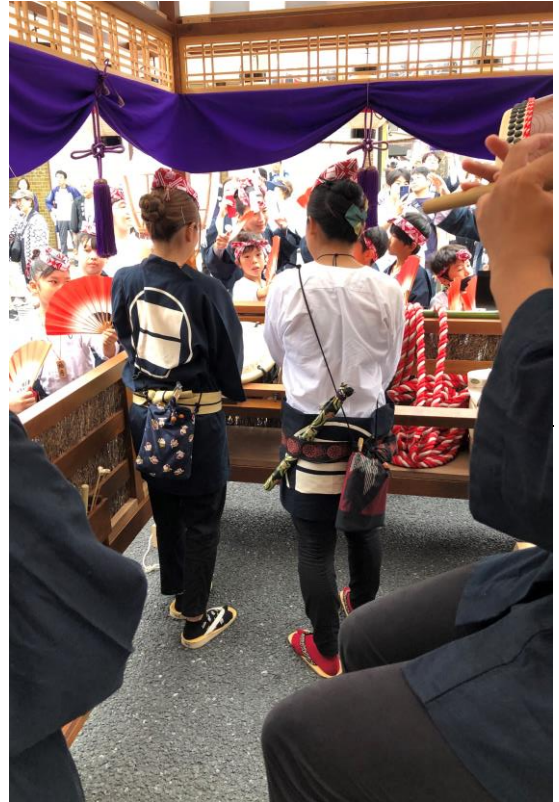
現代の飯能地方の底抜け屋台(三丁目)

お盛んな飯能の底抜けによる祭事は貴重なものといえます。

飯能での底抜け屋台の拡がり

飯能市内に伝わる底抜けを使った祭礼行事は、明治半ばに双柳、大正期に三丁目、昭和初期に原町にそれぞれ新久・仏子・高倉・野田など現在の入間市西部から祇園囃子とともに伝播されたようです。主に夏の八坂神社(天王さま)の祭礼行事として「祇園囃子演奏による底抜け曳行」が戦後市街地を中心に氏子町内・囃子団体に伝い広がりました。

飯能大通り西端にある飯能八坂神社のお祭りは戦前まで宮神輿の町内渡御でしたが、昭和二〇年代に各氏子町内持ちの底抜けが揃うに従い、底抜け中心のお祭りに代わっていききました。現在、「飯能夏祭り」という名称の一丁目・二丁目・三丁目・河原町・宮本町・柳原・原町・前田・中山・本郷の一〇ヶ町の底抜け競演が見どころの夏祭りとして存続しています。同じく七月一日に近い週末、双柳では八坂神社の祭礼に神輿・山車・底抜けを繰り出し、地区総出で村廻りを行っています。



屋台に床が無く、
囃子方は地面に立って演奏する（二丁目）

底抜け屋台の特色と装い
底抜け屋台の構造上の特色は、文字通り「床板が貼っていない」ことです。当然囃子方は屋台の内側を歩いて演奏します。「徒囃子・かはやし」といいます。

次に屋根廻り前後左右に市松模様のお障子を上に向かって拡げて設える「朝顔型屋根」が大方の底抜けに装備されおり、観客の目を惹きます。一方、双柳・中山の底抜けは山車と同じ唐破風屋根です。新久・高倉・仏子・野田も同様で「ヤグラ」と呼ばれます。
一般的装飾として、屋台正面に水引幕や注連縄、神を飾り、腰廻りは腰幕や柴垣で囲み、前梶付の四つ車上に土台を組んで六本もし

くは四本の柱を建ち上げ欄間を経て朝顔型屋根に至ります。欄間廻りに軒提灯が、柱途中にボンボリが、腰廻りに弓張提灯がそれぞれ飾られ、暗くなると懸命に太鼓を打つ若者を映し出します。

底抜け屋台のお囃子

底抜けでは「祇園囃子」が奏されます。屋台正面に締太鼓二名、脇に大太鼓一名、背面に篠笛、摺り鉦数名を配し歩行演奏します。大きな大太鼓(打面直径が二尺・六〇㎝)を使った威勢の良い調子が特徴で、山車で乗演する屋台囃子のような面踊りは付きません。

底抜け巡行中はゆっくりで賑やかな「道中囃子」を奏します。「ノウゲノヤマ」「昇殿崩し」「チャンチャーリコー」「ナガシ」「カケス」「名栗川小唄」などなど。
一方、門付けや引合せなど底抜けが立ち止まった際に演奏する「シヤンギリ」はテンポの速い激しいバチさばきが印象的で、大太鼓の発する大音は邪気を払い福を呼ぶと言われています。

底抜け屋台が文化財に指定

現在市域には一丁目・二丁目・三丁目・河原町・宮本町・原町・前田・柳原・中山・双柳・本郷・浅間・平松・中藤・川寺・玉宝寺・矢風八坂社所有の底抜け一七台が現存し、なかでも中藤・川寺・玉宝寺・矢風八坂社を除く一三団体が順調に祭事活動しているとして、令和六年六月「飯能の底抜け屋台行事」の名称で市の無形民俗文化財に指定されました。

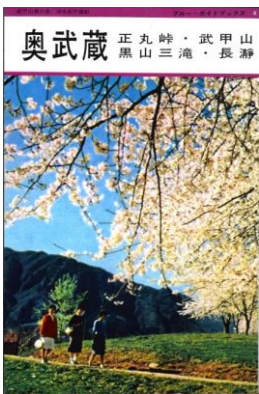
このたびの指定を契機に、地域遺産として地域活性化(まちづくり)、観光資源として地域振興(にぎわいづくり)、そして次世代を担う青少年の健全育成(ひとづくり)に貢献できるよう飯能の底抜け祭事が一層盛んになることを願ってやみません。

(飯能市郷土芸能保存会、
飯能市文化財保護審議委員)

どこまで「奥武蔵」か
加藤 寛之

本号発行の時点で「奥武蔵」はどこですかと問われたら、飯能市の山間部かな、と言っておけば多くの人が納得しそうです。でも、武甲山や長瀬も、と言ったらどうでしょうか。掲載の本の表紙は昭和38年に実業之日本社が発行した観光ガイドガイドブックで、「奥武蔵」の大きな文字に加えて正丸峠・武甲山・黒山三滝・長瀬を書き込んでいます。これは編集のオマケではなく、「奥武蔵」の範囲は時代や考え方で異なっているからです。

「奥武蔵」という概念について、太平洋戦争前から山歩きをしていた大石真人氏は、昭和29年に朋文堂が発行した『奥武蔵』に「奥武蔵は登山ないしハイキング地帯による分類の名称である。その範囲並びに名称については種々説がある」と書いています。



「奥武蔵」という表現は、武蔵野鉄道が吾野延伸（いわゆる吾野線）後に、観光開発で使い始めた言葉です。石灰石輸送が振るわなかった代りを、観光客増加にかけたのです。石組みで有名な八徳の三吉について貴重な記録をのこした神山弘氏は、1982年に岳書房が発行した『ものがたり奥武蔵』に、「奥武蔵」の名は西武鉄道が付けたというのが本当らしい。なにしろ太平洋戦争の始まる前の半世紀以上昔なので、確実なこととはわかっていないが「もと武蔵野鉄道といっていたこの西武線沿いの山々には未だ総称名が無かった。そこで奥ばやりに乗って、武電の宣伝部あたりが命名したこれは、武蔵の国の奥というよりも武蔵野電車からとったものなのである」と書いています。

「奥武蔵」という単語はだれでも使いそうな言葉ですが、私たちが「奥武蔵」で描くイメージは武蔵野鉄道がつくりあげたといえるでしょう。つまり、一般の住民が日常で使っていた用語ではないのです。戦後でもそうだったようで、有竹修二氏が昭和30年に奥武蔵研究会が発行した『武蔵野漫歩』でさえも「奥武蔵」という詞はまだ一般には通じにくい、一部登山家、ハイカーの間には、すでに立派に通用語になっている」と書

いています。なお、「奥武蔵」山間部のことで、吾野延伸によって終着駅から途中駅となった飯能街地は「奥武蔵野」の別称を設けて切り離れたようです。これは後述の武蔵野鉄道の広報紙「むさしあぶみ」で確認できます。でも今は「奥武蔵野」と呼ばないので、定着しなかったのでしょうか。

現在も続く奥武蔵研究会というグループは、「奥武蔵」のイメージ形成と範囲に大きく影響を与えた団体です。同会は、太平洋戦争前から吾野線で行ける山間部を踏査し、観光開発の基礎を築いた山登り愛好家の集まりで、戦前には武蔵野鉄道が観光案内に発行していた広報紙「むさしあぶみ」の利用者の集まり、あるいは、武蔵野鉄道と深い関係にあった「武蔵あぶみの会」関係者が中心母体でした。大石氏や神山氏もメンバーでした。このグループが吾野線沿線を起点に、横瀬から秩父方面あるいは比企丘陵から長瀬へと繋がる外秩父方面の情報を提供することで、「奥武蔵」の山々の観光開発が進みました。ですから、本稿冒頭のガイドブック『奥武蔵 正丸峠・武甲山・黒山三滝・長瀬』は、「奥武蔵」の範囲の考え方のひとつなのです。

「奥武蔵」の範囲を拡大しよう一つの大きな動きが、昭和11年の「正丸峠ドライブウエー」開通で

す。これで秩父が吾野駅からバスで行ける観光地になったのです。そのことで武蔵野鉄道は、武甲山あたりまでだった「奥武蔵」を、秩父市街地を過ぎ三峯神社を超えて奥秩父へ、さらに北は群馬県方向にまで広がるかのように広報するようにになりました。そうはいっても武蔵野鉄道の広告やパンフレットをみると、主な勧誘範囲は武甲山辺りまでだったようですが、「奥武蔵」の範囲はそれがどこまでかを語ることなく一挙に拡張したのです。

戦後、昭和20年代になると、また別の動きが始まりました。昭和26年の「埼玉県立奥武蔵自然公園」の指定です。これに先立ち、飯能町・原市場村・名栗村・高麗村・東吾野村・吾野村が「飯能地方自然観光地指定に関する陳情書」を埼玉県へ陳情していますから、この時点で現飯能市の山間部が「奥武蔵」だとする意識ができていたことになりました。そしてこの指定によって、目に見えなかった「奥武蔵」の範囲が「奥武蔵自然公園」としてではあっても地図上で明確になったといえます。昭和27年には、飯能町く高麗村く東吾野村く吾野村を通過しても正丸峠は超えないコース設定で、いわゆる「奥武蔵駅伝」が始まりました。現在の「奥武蔵」でイメージする範囲

は、これらと一致しているようです。

最後に蛇足ですが一言。吾野線延伸の時代ならば、「奥武蔵」とほぼ同じ範囲で西川材の「西川」という単語がすでにあつたはずですが、「西川」が世間に良く知られた単語だったならば、武蔵野電車は新たに「奥武蔵」で広報するのではなく「西川」を使えば良かったはず。西川は一般的な言葉でなかった、ということでしょうか。

本稿は飯能市立博物館令和6年度特別展「飯能の山をゆく旅の歴史と自然へのいざない」特別展関連講座「奥武蔵って、どこですか」(令和6年10月27日)を再構成したものです。

(当会会員)



正丸峠ドライブウエーの開通が奥武蔵を拡張させた(当時の記念絵葉書)

見学会「大宮の史跡を歩く」
関根 貴志

6月15日に「大宮の史跡を歩く」と題して、市外見学会を行いました。さいたま新都心駅で降り、氷川神社の約2kmの参道を歩いて境内を目指し、その後は大宮公園を通過して県立歴史と民俗の博物館を見学するという行程でした。

大宮の氷川神社といえば武蔵国の一宮で、埼玉県を代表する神社ですが、飯能地域とは縁が薄いなどという感じを個人的に持っていました。とはいえ当社は埼玉県そして武蔵国の歴史に深い関わりがあり、少し広い視野で学んでみようと思えました。

① 氷川神社

大宮氷川神社は、武蔵国に約二百八十あるという氷川神社の総本社で、「大宮」という地名の由来にもなっています。延喜式には一座として記載されていますが、江戸期には三



氷川神社参道

社一寺の神仏習合の形態になっていました。それぞれの神社・祭神・社家は次の通りです。

- ・氷川神社、須佐之男命(スサノオノミコト)、岩井家
- ・氷川女体神社、稲田姫命(イナダヒメノミコト)、東角井家
- ・中氷川神社、大己貴命(オオナムチノミコト)、西角井家

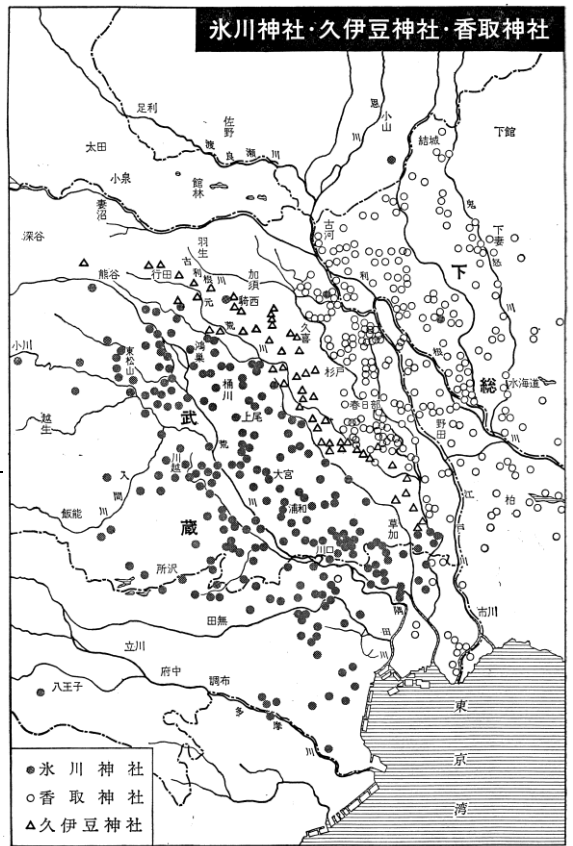
別当寺の観音寺は神仏分離令により廃寺となり、今その場所は「氷川の杜文化館」となっています。

祭神が示すように氷川神社は出雲系の神社ですが、同じく須佐之男命を祭神とする八坂神社・須賀神社などは別の系統です。出雲地方から直接勧請された神社は「須賀神社」「八雲神社」「出雲神社」等と称している場合が多く、かつて牛頭天王を祀っていた祇園信仰の系譜にある神社は「八坂神社」「祇園神社」「津島神社」等と称している場合が多いそうです。

一方、氷川神社は出雲から移住してきた人達が祖神を祀って氏神としたのを始まりとするようです。

国造本紀(『先代旧事本紀』巻十)によると、天穗日命(アメノホヒ)の十代後の子孫である兄多毛比命(エタモヒノミコト)が出雲族をひきつれてこの地に移住し、成務天皇の時代に大和朝廷から无邪志国造(むさしくにのみやつこ)として認められ、氷川神社の祭事を行ったとのこと

氷川神社・久伊豆神社・香取神社



氷川神社・久伊豆神社・香取神社の分布
(西角井正慶「祭祀圏の問題」より)

です。この一族は信濃から山を越えて多摩川の上流に移り(奥多摩には奥氷川神社がある)、やがて川を下って東京湾から荒川河口に入り、遡上していったようです。別の説では、東山道を通って北関東から南下した、あるいは信濃から甲州路を通って西北から入って来たという説もあります。狭山丘陵周辺にも多くの氷川神社があることを考えると、こちらも移動経路だったかもしれません。

前述した西角井家に生まれ、折口信夫の弟子でもあった西角井正慶は次のように述べています。

「武蔵国ことに埼玉県は古社分布に興味ある地域であると思ふ。

その第一地区は須佐之男命・稲田姫命・大國主命を祭る氷川神社の祭

祀圏、第二地区は経津主神(建御雷神)と共に国釀の使者となった大刀の(靈威)を祭る香取祭祀圏、第三地区はその中間地帯をなす久伊豆神社圏と、この分布に考へられることは、宗教社会学的な問題と思ひ、小さな研究を他に発表しましたが、いま一つ諏訪の祭祀圏をも加へなくてはならぬ。

この方は歴史も降り諏訪族の移住もやや明らかであるが、建御名方神を奉斎する神社はことに比企地方に多い。「(出雲と武蔵と)昭和三十三年九月)

右の図は正慶氏が作成した図で、氷川・香取・久伊豆の三社の位置を示した図になります。河川の流域圏が各社の分布と重なることが見て取れ、氷川神社が荒川流域の東西に

広がりを見せていることが見て取れます。

一方、飯能近辺にはほとんど存在していませんが、「高麗郡」として考えると白鬚神社の祭祀圏というものも想定できそうですし、丹生明神を祀る丹党の勢力圏下だったということも背景にありそうです。



蛇の池

また本殿西側の奥には「蛇の池」という湧き水があり、立て札には「この神秘的な湧き水があった為に、この地に当社が鎮座したとも伝えられ」とあります。もとは見沼の水神を祀っていたところへ出雲族の神が習合したと考えられています。従って氷川の神は水神的な性格も強いと言えます。例えば川越の砂の氷川神社は寛保二年の洪水を契機として創建されたようですが、八岐大蛇は洪水の擬人化という見方もあり、これを征した須佐之男は水害多発地帯である荒川水系の流域でよく祀られた、ということも考えられるかもしれません。

② 大宮公園

境内を後にして公園へ進みます。此処はもともと神域だったところを県内最初の県営公園として明治一八年（一八八五）に建設されたもので、これにより約九万坪あった神域は約二万三千坪に減ったと言えます。

大正十年（一九二一）に本多静六博士と弟子の田村剛による氷川公園改良計画が作成されています。これをもとに桜の植栽や、舟遊池、運動場等が整備されています。

ちなみに博士による「飯能遊覧地設計」の講演は先んじること9年前の明治四五年（一九一二）でした。



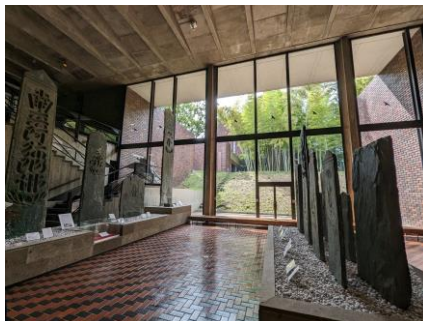
舟遊池

③ 県立歴史と民俗の博物館

舟遊池沿いに進んで博物館に向かいます。ここは展示されている内容は勿論ですが、建物そのものが大きな見どころです。

日本を代表する建築家の前川國男による設計で、昭和四六年の竣工です。奇を衒わず、中心を置かない、環境に溶け込む設計や、外壁の打込ミタイル、床の赤と黒の網代張りタイル、打放しコンクリート、地下室で掘り込んで実現した高低差のある空間などが特徴です。

県内の他の前川建築には、浦和の埼玉会館、長瀬の県立自然の博物館があります。（これらにきっかりで、後に長瀬の博物館へ行きました）



板碑の展示

全体を通して炎天下の厳しい道行きでしたが、飯能を他の地域との比較で考えることが多い、有意義な小旅行でした。

（当会会員）

〈参考文献〉

・高澤等『氷川神社と武蔵国の古代』令和六年六月

・原武史『^出雲Vという思想』平成八年十月

・昭島市史編さん委員会『昭島市史』昭和五三年十月

・埼玉県立歴史と民俗の博物館『前川建築のすすめ』令和三年十一月
・東京藝術大学 とびらプロジェクト『青木淳が語る前川國男』平成二八年七月

鎌倉街道 上道

例会の報告

十二月十四日（土）に会員の茂木章さんに「鎌倉街道 上道」と題した講演を行っていただきました。

今回は高崎城址から狭山市七曲井までの行程について写真を交えながら紹介していただきました。

特に国の史跡に認定された毛呂山町の鎌倉街道上道に含まれる、堂山下遺跡、崇徳寺跡、苦林宿を詳しく説明していただきました。



堂山下遺跡(苦林宿)の鎌倉街道上道

飯能の旗本・大名墓 中山一族の墓を学び訪ねる

例会の報告

二月十五日(土)に、副会長の高澤等さんに「飯能の旗本・大名墓 中山一族の墓を学び訪ねる」と題した講演を行っていただきました。前半は市内にある旗本・大名墓などについてご説明いただき、後半は能仁寺にある中山一族・黒田家の墓を一基々々巡って、どういう人物のお墓なのかを解説していただきました。



黒田家墓所にて

大名墓を間近で見るということはなかなかできることではなく、此処が貴重な歴史遺産であることを改めて実感しました。

飯能郷土史研究会の活動

◎令和六年度事業報告

▽総会

・四月二十日(土)

講演会

「飯能の武人」

丹党中山氏を再考する

講師 高澤 等氏

(当会副会長、日本家紋研究会会長、飯能市文化財保護審議委員)

▽例会

・六月十五日(土)

現地見学会

「大宮の史跡を歩く」

九月二十八日(日)

「飯能の底抜け屋台について」

講師 小槻 成克氏

(飯能市文化財保護審議委員、飯能市郷土芸能保存会)

十二月九日(土)

「鎌倉街道 上道」

講師 茂木 章氏

(当会会員、古道を楽しむ会副代表、毛呂山町歴史民俗資料館 鎌倉街道ガイドボランティア)

二月十五日(土)

見学会

「飯能の旗本・大名墓

中山一族の墓を学び訪ねる」

講師 高澤 等氏

◎令和七年度事業計画

▽総会

・四月十九日(土)

講演会

「飯能市域に所在する近世大名墓の特異性について」

講師 村上 達哉氏

(飯能市立博物館主幹)

▽例会

・六月二十八日(土)

現地見学会

加治神社、智観寺周辺

十月四日(土)

「飯能地域の鎌倉街道」

講師 高澤 等氏

(当会副会長、日本家紋研究会会長、飯能市文化財保護審議委員)

十二月十二日(土)

「文化新聞で読む怪奇事件」

講師 関根 貴志

(当会会員)

二月十四日(土)

(内容未定)

▽郷土はんのう発行

・三月三十一日 四十五号

(当会副会長、日本家紋研究会会長、飯能市文化財保護審議委員)

▽郷土はんのう発行

・三月三十一日 四十四号

◎令和七年度事業計画

▽総会

・四月十九日(土)

講演会

「飯能市域に所在する

近世大名墓の特異性について」

講師 村上 達哉氏

(飯能市立博物館主幹)

▽例会

・六月二十八日(土)

現地見学会

加治神社、智観寺周辺

十月四日(土)

「飯能地域の鎌倉街道」

講師 高澤 等氏

(当会副会長、日本家紋研究会会長、飯能市文化財保護審議委員)

十二月十二日(土)

「文化新聞で読む怪奇事件」

講師 関根 貴志

(当会会員)

二月十四日(土)

(内容未定)

▽郷土はんのう発行

・三月三十一日 四十五号

▽インターネットでの交流および情報公開について

・SNS(Facebook)に飯能郷土史研究会のグループを作りました。興味のある方はご参加ください。(https://www.facebook.com/groups/1379468322825755)

・これまで発行した「郷土はんのう」について、インターネットで見られるようにしました。ぜひご覧ください。(https://ghosts.xrea.jp/kyoudo_hannou/)



Facebook



郷土はんのう

計報

当会理事として永年ご協力いただきました浅見賢治様が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

お祈り申し上げます。

郷土はんのう 第四十四号

発行日 令和七年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

〒350-0227 埼玉県坂戸市仲町一-二五

一〇〇五(関根方)

電話 〇四九-二八八一-四四〇

題字 大野亮弘

印刷所 プリントバック